

## サミュエル・ハンチントンと政軍関係論

宮本 悟

昨年（2008年）のクリスマス・イブ、すなわち2008年12月24日に米国の高名な政治学者であるサミュエル・ハンチントンが死去した。ハンチントンは1996年に出版された『文明の衝突』（邦訳は1998年出版）の著者として日本でもよく知られている。米同時多発テロ以降の米国のテロとの戦いが、イスラム教文明とキリスト教文明の図式で認識される向きが多いのも、『文明の衝突』の影響のためと考えられている。国際関係論で大きな影響を及ぼしたハンチントンであったが、彼が最初に手がけた研究は、国際関係ではなく、政軍関係（Civil-Military Relations）であった。彼が執筆した最初の著書である1957年出版の『軍人と国家』は、政軍関係論の古典的名著とされている。

ハンチントンは、軍人はその本質において政治に介入しようとするのを前提にして政軍関係論における重要な1つの疑問を解くことから出発した。その疑問とは「なぜ軍部は政治に介入するのか？」である。この疑問は、シビリアン・コントロールと深く関連してくる。シビリアン・コントロールとは、文民である政治家が軍隊を統制するという理念である。シビリアン・コントロールを実現するためには、軍部が政治に介入しないようにすることが重要な課題である。

ハンチントンによると、シビリアン・コントロールを実現するためには2つの方法がある。1つ目は主体的シビリアン・コントロールであり、専門職業化されていない軍人に対して文民の権力を極大化し、軍隊を統制する方法である。2つ目は客体的シビリアン・コントロールであり、軍人を専門職業に専念させることによって政治的に中立化させ、軍人の政治権力を極小化させることで軍隊を統制する方法である。

ハンチントンの議論で注目されたのは、客体的シビリアン・コントロールである。主体的シビリアン・コントロールと類似した概念は、ハンチントン以前にも存在した。客体的シビリアン・コントロールこそが、新しい概念としてハンチントン

が政軍関係論に導入したものであった。

客体的シビリアン・コントロールでは、軍人が専門職業により専念するために、プロフェッショナルリズムを高めることが求められる。プロフェッショナルリズムとは、専門技術と責任意識、専門集団意識によって構成される。弁護士や医師などの専門職業に従事する者も、その分野におけるプロフェッショナルリズムを帯びている。軍人のプロフェッショナルリズムでは、①専門技術としての暴力の管理、②責任意識としての国家安全保障に対する責任、③専門集団意識としての他の社会団体と異なる特別な団体意識が求められる。プロフェッショナルリズムを高めることによって、シビリアン・コントロールが成立するというハンチントンの議論は、当時、大きな議論を呼んだ。

客体的シビリアン・コントロールを否定した研究者としては、サミュエル・ファイナーやモーリス・ジャンヴィッツが知られている。両者は、軍人にプロフェッショナルリズムが存在することを否定していない。しかし、軍人のプロフェッショナルリズムが軍部の政治介入を抑制する要因にはならないと反論した。ファイナーやジャンヴィッツによると、プロフェッショナルリズムに関係なく、軍部は本質的に政治に介入しようとする存在である。

問題とされたのは、ハンチントンが実証ケースとして論じた戦前の日本とドイツの事例である。簡潔に要約すると、ハンチントンは、旧日本軍はプロフェッショナルリズムが確立されていなかったために政治に介入し、旧ドイツ軍はプロフェッショナルリズムが高かったために政治に介入しなかったと論じた。一方、ファイナーは、旧日本軍のプロフェッショナルリズムの高さを挙げ、ハンチントンが強引な議論を展開していると批判した。同じくプロフェッショナルリズムが高いのに、日独では結果が異なるのでは、プロフェッショナルリズムが軍部の政治介入の要因とは考えにくいのである。ファイナーは、著書である『馬上の人』

で、プロフェッショナリズムではなく、その国家における政治文化の発展の水準によって軍部は政治に介入すると論じた。

この批判に対するハンチントンの答えの1つは、1968年に出版された『変革期社会の政治秩序』である。ハンチントンは『軍人と国家』とは大きく異なる議論を展開した。それは、政治制度の発展の水準によって軍部は政治に介入するというものであった。これは『馬上の人』の理論の多くを受け入れたものとなった。『変革期社会の政治秩序』における議論は、ハンチントンの著書である1991年の『第三の波』でも強く反映されている。

しかし、ハンチントンは、客体的シビリアン・コントロールの概念を棄てず、プロフェッショナリズムでも軍部の政治介入を抑えることができると考え続けた。では、プロフェッショナリズムと政治制度の発展の水準はどう関係があるのか。ハンチントンは1968年に出版された『国際社会科学百科事典』の「政軍関係」の項目で、プロフェッショナリズムが高くても、政治制度が弱く、分裂していれば、軍部は政治に介入することがあると論じた。ハンチントンの議論では、シビリアン・コントロールの第一条件は、正統で実効的な政治制度の存在である。その前提条件があって、はじめてプロフェッショナリズムがシビリアン・コントロールにとって重要な要素となってくるのである。

筆者は、その議論の延長線上にある疑問を持った。政治制度（文民政府）の分裂が軍部の政治介入を招くのであれば、反対に軍部の分裂は軍部の政治介入を抑えるのではないだろうか。筆者の疑問はこれである。その疑問を解く試みの1つは、『年報政治学』2005年第2号に掲載された「北朝鮮における政軍関係——なぜ北朝鮮の軍人はクーデターを起こさなかったのか？」で論じた。筆者は、別の事例も使って、この議論をさらに発展させていきたい。ハンチントンは世を去ったが、彼の業績はさまざまな分野に影響を与え、さらに多

くの研究課題を研究者たちに与えていったのである。

## 参考文献

- Samuel P. Huntington, *The soldier and the state: the theory and politics of civil-military relations*, (Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 1957). [邦訳：サミュエル・ハンチントン著、市川良一訳『軍人と国家』上下巻、原書房、1978-1979年]
- S. E. Finer, *The man on horseback: the role of the military in politics*, (New York: F.A. Praeger, 1962)
- Morris Janowitz, *The military in the political development of new nations: an essay in comparative analysis*, (Chicago : University of Chicago Press, 1964). [邦訳：M. ジャノビッツ著、張明雄訳『新興国と軍部』世界思想社、1968年]
- Samuel P. Huntington, *Political Order in Changing Societies*, (New Haven and London: Yale University Press, 1968). [邦訳：サミュエル・ハンチントン著、内山秀夫訳『変革期社会の政治秩序』上下巻、サイマル出版会、1972年]
- Samuel P. Huntington, "Civil-Military Relations," in David L. Sills and Robert K. Merton eds., *International encyclopedia of the social sciences*, Vol.2, (New York: The Macmillan Company & The Free Press) 1968, printed edition 1972, pp.487-495.
- Samuel P. Huntington, *The third wave: democratization in the late twentieth century*, (Norman: University of Oklahoma Press, 1991). [邦訳：S.P.ハンチントン著、坪郷實、中道寿一、藪野祐三訳『第三の波：20世紀後半の民主化』三嶺書房、1995年]
- 宮本悟「北朝鮮における政軍関係——なぜ北朝鮮の軍人はクーデターを起こさなかったのか？」『年報政治学』2005年第2号（2006年3月）、195-215頁。

(みやもと・さとる 聖学院大学総合研究所准教授)